

第8回企画展



石器のいろは

～収蔵資料の紹介～



立正大学博物館
平成23年7月

ごあいさつ

今回の企画展では、立正大学博物館の収蔵資料のうちの石器について紹介します。人類が誕生してから道具の一つとして利用されてきたものに石器があります。最初は礫などをそのまま使用し、そののち礫などを加工して用途に合った道具として使用していくようになります。石器は、日本では旧石器時代から弥生時代にかけて最も多く使用され、そののち鉄器に変わっていきます。石器は大きく分けて打製石器、磨製石器に区分されます。また用途として石斧、石鏃、尖頭器、石匙、石皿、装飾品など、種類は多岐にわたります。

立正大学博物館収蔵資料のうち常設展示資料として、文学部考古学研究室がこれまでに行ってきた調査による資料があります。今回はこのほかに東京都町田市本町田遺跡、埼玉県川口市石神貝塚などの出土資料を新たに紹介します。

収蔵資料の展示とともに石器製作についても紹介し、技術面からも石器についてみていきたいと思います。

平成 23 年 7 月

館長 池上 悟

目次

1. 石器研究のあゆみ
2. 石器製作
3. 立正大学博物館所蔵の石器

例言

1. 本図録は平成 23 年 7 月 4 日（月）～8 月 6 日（土）にかけて開催する第 8 回企画展「石器のいろは～収蔵資料の紹介～」の展示図録として作成した。
2. 本図録の編集は、館長池上悟の指示により内田勇樹（博物館学芸員）が行った。
3. 展示資料及び写真の一部は久保田正寿氏より提供して頂いた。また、収蔵資料の写真撮影は砂生智江（立正大学大学院修士課程 2 年）が行った。
4. 企画展開催にあたって、参考・引用した文献は巻末に一覧として掲載した。

1. 石器研究のあゆみ

石器とは、石を使った道具の総称で、木器・金属器などと対比されます。加工の方法からみると打製石器や磨製石器に大別され、用途からみると生活用具・信仰関係・装身具など多様な用途がみられます。

石器について文献上確認できる古い記事は、『続日本後記』『三代実録』などに見られます。古くは天上の神軍が使った鏃が空から降ってきたものと考えられ、『続日本後記』（巻8）には、承和6（839）年、出羽国田川郡の西浜一带に長雨が続き雷鳴も甚だしく、10余日をへて晴天になったが、そのとき海浜に鏃に似たり鏃に似た石が発見され、その色彩は白や黒、青、赤などであったという。国司はこれらを朝廷に献上し、朝廷は異変のあることを恐れ、仏法を修し神に幣を奉るように勅を下したという記事があります。同じように石鏃が空から降ってきたという記事が『三代実録』（巻46）元慶8（884）年9月29日の記事にもみられ、石器天降説として伝承されていきます。その後17世紀後半になって、松岡玄達、新井白石などによって石器人工説が唱えられ、変化していきます。江戸時代頃から好事家による石器蒐集が行われ奇石として蒐集されていました。

その中でも木内石亭（1724～1808年）は、多くの愛石家たちの中心的な人物で、幼少の頃から石を集めていました。木内石亭は単に石を集めるだけでなく、集めた石を整理し、考証して『雲根志』『曲玉問答』『鏃石伝記』など多数の著作を遺し、学問的に検証していることが評価されています。



▲伊藤圭介蒐集石器（吉田格コレクション）

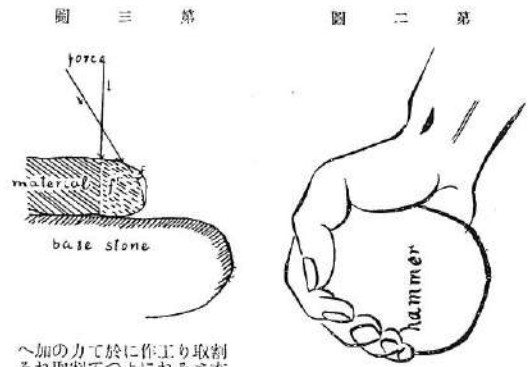
わが国最初の理学博士である伊藤圭介（1803～1901年）は、明治6年に『日本産物志』の編集に従事し、同9年に「美濃部」三冊が刊行され、その中で伊藤圭介蒐集の石器が挿図4枚で紹介されています。

また、幕末になるとオランダから 1823 年に、出島のオランダ商館医としてフランツ・フォン・シーボルト (F.von Siebold 1796-1866 年) が来ました。シーボルトは鳴滝塾を開塾し、西洋医学を日本人の弟子達に教え、その中の一人に伊藤圭介 (1803-1901 年) がいました。シーボルトは帰国後に様々な分野から日本を紹介した『日本』を刊行します。この大著は、日本人の弟子達に与えた課題のレポートをもとにしたといわれており、その中で考古学関係の挿図などは、伊藤圭介がまとめて提出したものでした。伊藤圭介は先学の木内石亭や谷川土清などを参考にし、自らも明治 6 年に『日本産物志』の編纂に携わると、この中にも石器の紹介をしています。

明治に入り、アメリカ人のエドワード・シルヴェスター・モース (Edward Sylvester Morse 1838-1925 年) による大森貝塚の発掘が行われると、日本の考古学が大きな転機を迎えることとなります。この発掘によって学問的に大きな進展をみせると、各分野において様々な研究が発達していきます。

石器の研究も遺物の検証を行う中で、実験的検証を取り入れることも行われるようになりました。樋口清之が「実験的石器製造法」(『考古学雑誌』第 17 巻第 3 号 (昭和 2 年 3 月)) において石器製作について紹介しています。石器製造において必要となる道具 8 点 (大形石槌・小形石槌・大形削剥器・小形削剥器・尖頭削剥器・台石・台板・指袋) を紹介し、(1) 割取、(2) 敲割 (A 粗割、B 小割)、(3) 削剥 (A 粗剥、B 精剥)、(4) 仕上げの 4 つの工程で石器製作を説明しています。

石器製作に関する研究史として、鈴木美保氏の「1 研究史にみる石器製作実験—理論・

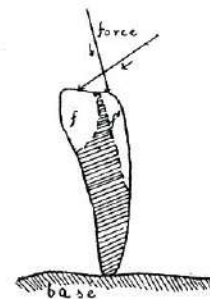


へ加の力て於に作り取割
るれ取割てつよにれそま方
す示を分都
加は矢分都るれ取き缺は「
す示を向方の力

す示を力持支の槌石形小

樋口清之「実験的石器製造法」掲載挿図

図 四 第



て於に作工のり割き敲
缺てつよに向方の力加
相の形の分都るれ取き
部るけ缺は「す示を異
示を向方の力加は欠分
す

樋口清之「実験的石器製造法」掲載挿図

方法、今後の展望—」(『石器づくりの実験考古学』学生社 2004 年 5 月) に詳細に纏められています。鈴木氏は欧米を中心とする石器製作実験に関する研究を

- ① 1838 年～ 1950 年代：石器製作における実験的視点が考古学的に定着する時代
- ②～ 1970 年代前半：実験的研究の爆発的增加、技術的研究への関心の高まり
- ③ 1970 年代後半～：中位理論としての実験、実験的研究からの文化的領域の解釈
- ④として日本における石器製作実験に関する

研究史について整理し、日本において製作実験の研究は 80 年代に入ってから徐々に増えはじめ、90 年代になると個別の石器技術研究会の設立など共同研究を目指す方向性が現れるようになり、そして 2000 年に前・中期旧石器捏造事件が明らかになると、それまでの事例的研究に対して、実験考古学の方法論や理論的位置づけを問い、今後の可能性を考える方向に目が向けられていることが大きな特徴であるとしています。

このように研究的な進展とともに、各博物館などのイベント事業において体験学習として「石器づくり」「勾玉づくり」「土器づくり」などが一般の人や子ども達を対象とした、実験考古学から得られた方法で教えられています。また、一般書や博物館の企画展などでも取り上げられるようになります。古くは小林行雄『古代の技術』（塙書房 昭和 37 年 9 月）、『続古代の技術』（塙書房 昭和 39 年 11 月）が、潮見浩『図解 技術の考古学』（有斐閣

昭和 63 年 4 月）などがあり、平成 14 年には大沼克彦氏が『文化としての石器づくり』（学生社 平成 14 年 5 月）として石器づくりの体系的な著書を刊行されています。また、博物館展示においては平成 10 年に大田区立郷土博物館で「製作工程の考古学」（大田区立郷土博物館編集『ものづくりの考古学』東京美術 平成 13 年 2 月刊行）が、平成 19 年に青梅市郷土博物館で「誰もができた石器作り」（同名の図録が刊行されている）が開催され、各博物館などでも実験考古学の新たな視点が紹介されています。

※掲載した挿図は、各書籍より転載しています。



図 32 石ハンマーによる直接打法
大沼克彦氏『文化としての石器づくり』より



大田区立郷土博物館編『ものづくりの考古学』より



図 2 両極敲打技法の実際
青梅市郷土博物館『誰もができた石器作り』より

2. 石器製作

石器はどのようにしてつくられたのでしょうか。石器が主に使われていた時代（旧石器～弥生時代）には文字がなく、記録が残っていません。遺跡から出土した遺物を詳細に観察し、答えを導き出します。しかし、遺物の観察からだけでは不明な点も出てきます。そこで、実際にその遺物を作ってみるにより検証する実験考古学という分野があります。

実験考古学は、単に資料を復元するだけでなく、元の資料を検証することを目的としたものです。

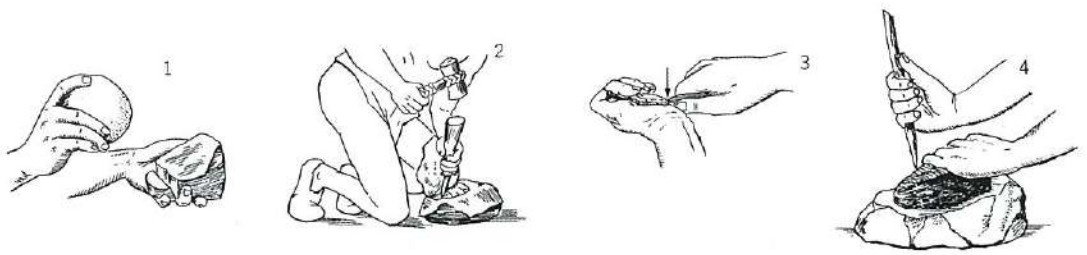
石器の製作では、大きく分けて打製（たたく）・磨製（みがく）・敲打（コツコツたたく）という3つの動作に分れ、台石剥離法、直接打撃法、間接打撃法、押圧剥離法、敲打法、研磨法、擦切り法などがあります。

また、剥片石器群を作る技法として両極打法、ルヴァアロワ技法、瀬戸内技法などがあります。ルヴァアロワ技法は、ヨーロッパの中期旧石器文化に特徴的な技術とされ、剥片の形を規程す

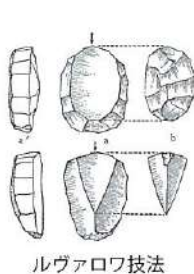
るため、石核の剥片剥取面を入念に整えるところが特徴的です。瀬戸内技法は、翼状の剥片をつくるものです。サヌカイトを素材とした横剥ぎの連続した特殊な技法で、この技法によって作られた石器の代表的なものとして国府型ナイフ形石器があります。

また、押圧剥離では胸圧法、湧別技法などがあります。胸圧法は、中米の先史時代の石器づくりにみられ、棒の一端を胸に当てて地面に固定した石核を押し剥ぐ方法で、薄く狭長な石刃を作る方法です。湧別技法は、木の葉形の両面石器を素材とし、その長軸に沿うように削片（スポール）を剥し打面を作ります。そこから一定の部位に一定の方向から剥離をし、定形の剥片を連続的に剥していく方法です。北海道の湧別遺跡出土例が標式となっています。

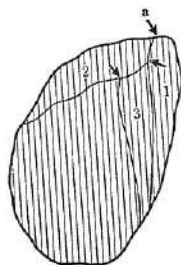
このように様々な方法で石器は作られていますが、その方法を検証していくことが実験考古学となります。



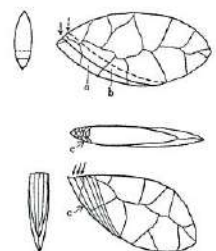
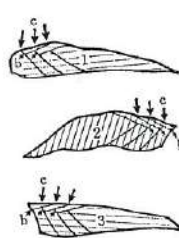
石器の製作法 1 直接打法 2 間接打法 3 押圧剥離 4 台石打法 (K. P. オークリー原図)
 (『考古学ゼミナル〈学生版〉』山川出版社 昭和51年より転載)



ルヴァアロワ技法



瀬戸内技法



湧別技法

(『日本考古学を学ぶ(2)〈有斐閣選書〉 有斐閣 昭和54年より転載)

久保田正寿氏製作の石器



磨製石斧の製作

1は磨製石斧を製作する際に使用したハンマーです。磨製石斧も敲打技法によって整形され、磨きが行われて完成します。2は敲打技法によって整形途中のものです。3は完成した磨製石斧です。4は実際に遺跡から出土したものです。



石皿と磨石



(1～3,5～7;久保田正寿氏所蔵)

石皿は粉を作るためにすったり、食物を練りつぶしたり、砕いたりするために使用したものです。粉を作る際に磨るための石が磨石です。実際にこのように使ってみると6のように磨耗して表面がツルツルの状態になります。この状

態では磨ることが出来ないので、反対側の凹凸が残る自然面のほうを使うようになります。

このようにして実際に道具を作ったり使用することで得られる情報があり、実際の出土遺物などの観察に役立ちます。

両極敲打技法

打製石器の多くが両極敲打技法で成形されていることが明らかとなってきています。両極敲打技法は、台石とハンマーを用いて、素材を成形していく技法です。敲打とは「コツコツとたたく」動作で、台石上で両側の側縁をひっくり返しながらかいていき成形します。

台石とハンマーによる打撃痕が残る場合があります。ハンマーの打ちつける箇所と台石のあたる箇所がセット関係になることがわかります。実際の遺物でもこのような痕跡が確認されることから、この技法の検証になります。また、ハンマーにも特徴的な痕跡が残ります。



①素材を台石に立てて、ハンマーの一端を握って敲く。



②初期成形の形。さらに側縁の天地を替えながら成形を継続する。



③基部を台石にあて刃部を敲く。ハンマーの平坦部分を用いる。羽子板方式。



④「打製石斧の完成。(長径11cm、成形時間2分20秒)



⑤側縁部成形の結果生じたハンマーの痕跡 (U字形に抉られる)



⑥羽子板方式で生じたハンマーの痕跡 (白く見える部分)

(写真提供：久保田正寿氏)

平成 22 年度の博物館実習の受講生（熊谷校舎）が、久保田氏指導の下、打製石器を製作しました（『立正博物館課程年報』13号に詳細が報告されています）。

A～Gまでが、受講生によって製作された打製石斧です。H・Iが実際の遺跡から出土した打製石斧です。

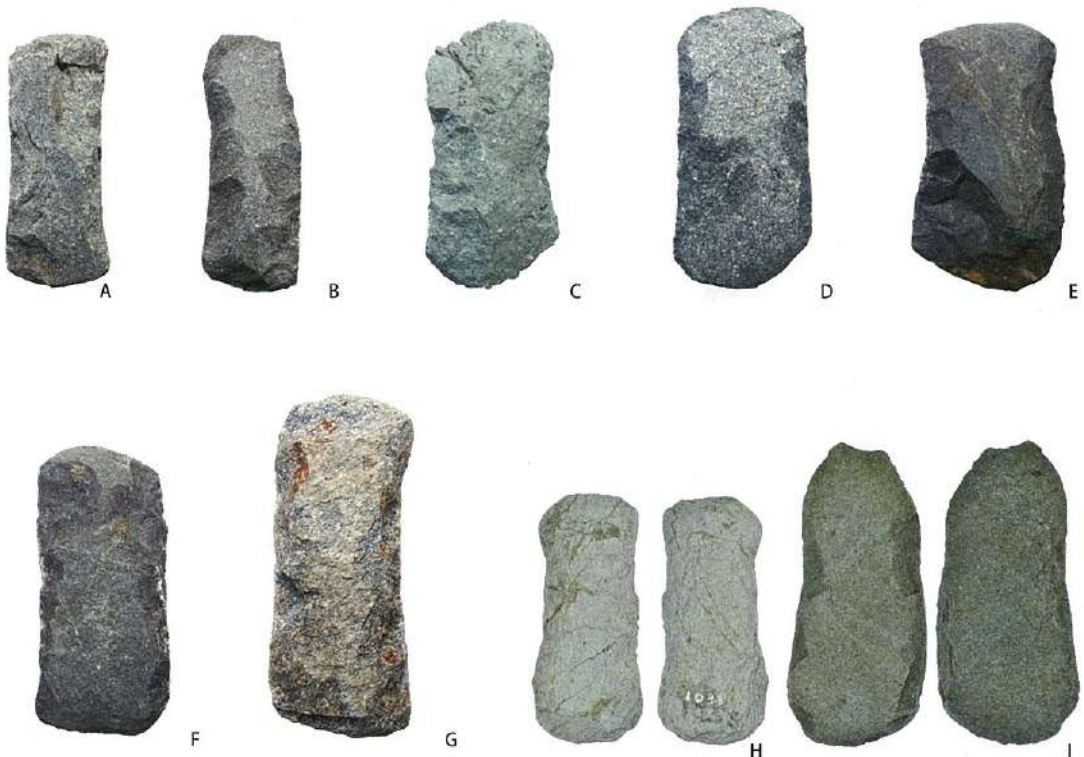
ほとんど見分けが付かないくらいに出来上がりました。この受講生が製作した打製石斧を観察してみた打撃痕跡は、実際の出土遺物を観察すると同じような痕跡がみられることがあります。

実験考古学は、誰にも出来る簡単なものではありませんが、実際に製作してみると、観察だけでは分からなかったことが分かるようになり、検証の幅が広がっていく研究です。



両極敲打技法

（写真提供：久保田正寿氏）



（A～G 写真提供：久保田正寿氏）

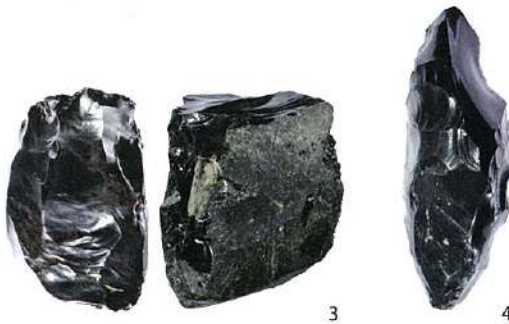
3. 立正大学博物館所蔵の石器



1. 原石（黒曜石・静岡県自由峠付近）
【最大長 7.5cm/最大幅 6.3cm/厚さ 4.9cm/重さ 210g（左下）】



2. 原石（サヌカイト（上段）,安山岩（下段）・香川県善通寺市）
【最大長 6.4cm/最大幅 17.0cm/厚さ 3.0cm/重さ 210g（左上）】



3. 石核（黒曜石・北海道白滝遺跡・S=1/10）
【厚さ 23.8cm/重さ 3000g】

4. 石核（黒曜石・北海道白滝遺跡・S=1/6）
【厚さ 5.8cm/重さ 760g】



5. 石刃（黒曜石・北海道白滝遺跡・S=1/4）
【厚さ 3.8cm/重さ 280g】



6. 尖頭器（黒曜石・北海道白滝遺跡・S=1/4）
【厚さ 1.7cm/重さ 175g】

7. 尖頭器（黒曜石・北海道白滝遺跡・S=1/4）
【厚さ 1.5cm/重さ 127g】



8. 尖頭器（頁岩・東京都回田（鈴木）遺跡・S=1/2）
【厚さ 0.7cm/重さ 10g】

9・10. 石錐（頁岩・樺太出土地点不明・S=1/2）
【9:厚さ 0.5cm/重さ 5g, 10:厚さ 0.9cm/重さ 5g】

11～13. 槍

(11; 樺太江ノ浦貝塚, 12 樺太鈴谷貝塚, 13; 樺太出土地点不明・S=1/2)



11; 安山岩 / 厚さ 0.8cm / 重さ 4g

12; 安山岩 / 厚さ 0.9cm / 重さ 9.9g

13; 安山岩 / 厚さ 1.1cm / 重さ 38.6g

14～15. 有舌尖頭器, 16～17. 銛先鏃, 18～19. 鏃

(14・18・19; 樺太江ノ浦貝塚, 15; 樺太出土地点不明, 16; 樺太留多加 C, 17; 樺太鈴谷貝塚, ・S=1/2)



14; 頁岩 / 厚さ 0.4cm / 重さ 1.9g

17; 安山岩 / 厚さ 0.4cm / 重さ 2.4g

15; 頁岩 / 厚さ 0.5cm / 重さ 3.5g

18; 頁岩 / 厚さ 0.4cm / 重さ 1.2g

16; 頁岩 / 厚さ 0.5cm / 重さ 2.9g

19; 玉髓 / 厚さ 0.5cm / 重さ 1.4g

20～30. 鏃 (20; 伊藤圭介蒐集石器, 21～30; 東京都本町田遺跡・S=1/1)



20; 頁岩 / 厚さ 0.7cm / 重さ 0.4g

23; 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 0.5g

26; チャート / 厚さ 0.3cm / 重さ 1.7g

29; 頁岩 / 厚さ 0.6cm / 重さ 1.3g

21; 黒曜石 / 厚さ 0.3cm / 重さ 0.4g

24; チャート / 厚さ 0.7cm / 重さ 2.6g

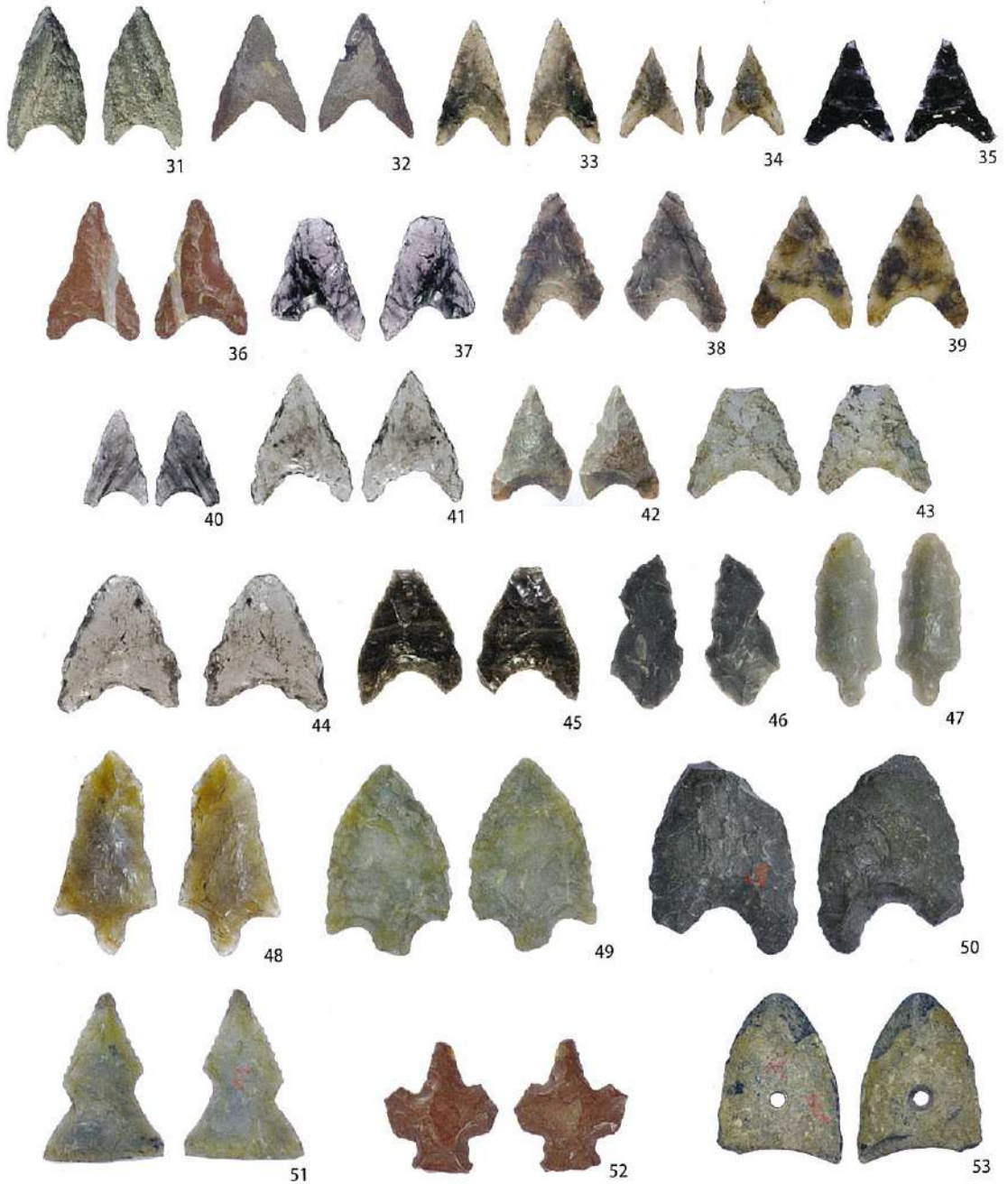
27; チャート / 厚さ 0.3cm / 重さ 0.5g

30; 頁岩 / 厚さ 0.8cm / 重さ 2.7g

22; 黒曜石 / 厚さ 0.3cm / 重さ 0.3g

25; 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 10g

28; 頁岩 / 厚さ 0.4cm / 重さ 1.1g



31: 頁岩 / 厚さ 0.7cm / 重さ 1.1g

32: 安山岩 / 厚さ 0.3cm / 重さ 0.6g

33: 黒曜石 / 厚さ 0.3cm / 重さ 1.2g

34: チャート / 厚さ 0.7cm / 重さ 1.6g

35: 黒曜石 / 厚さ 0.5cm / 重さ 0.9g

36: チャート / 厚さ 0.5cm / 重さ 0.6g

37: 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 0.5g

38: チャート / 厚さ 0.4cm / 重さ 0.7g

39: チャート / 厚さ 0.2cm / 重さ 0.7g

40: 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 0.7g

41: 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 1.1g

42: チャート / 厚さ 0.45cm / 重さ 0.6g

43: 頁岩 / 厚さ 0.25cm / 重さ 0.6g

44: 黒曜石 / 厚さ 0.4cm / 重さ 1.1g

45: 黒曜石 / 厚さ 0.5cm / 重さ 0.9g

46: チャート / 厚さ 0.5cm / 重さ 1.2g

47: チャート / 厚さ 0.6cm / 重さ 1.5g

48: チャート / 厚さ 0.6cm / 重さ 2.1g

49: 頁岩 / 厚さ 0.5cm / 重さ 2.8g

50: 安山岩 / 厚さ 0.6cm / 重さ 4g

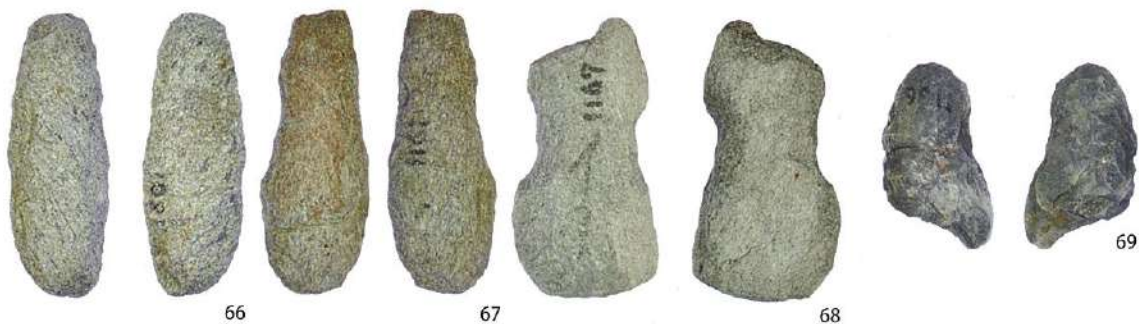
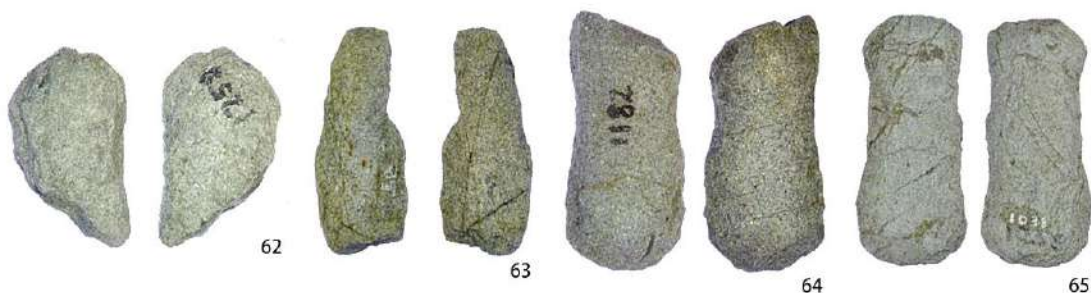
51: チャート / 厚さ 0.6cm / 重さ 2.1g

52: チャート / 厚さ 0.4cm / 重さ 1g

53: 頁岩 / 厚さ 0.3cm / 重さ 2g

54～70. 打製石斧

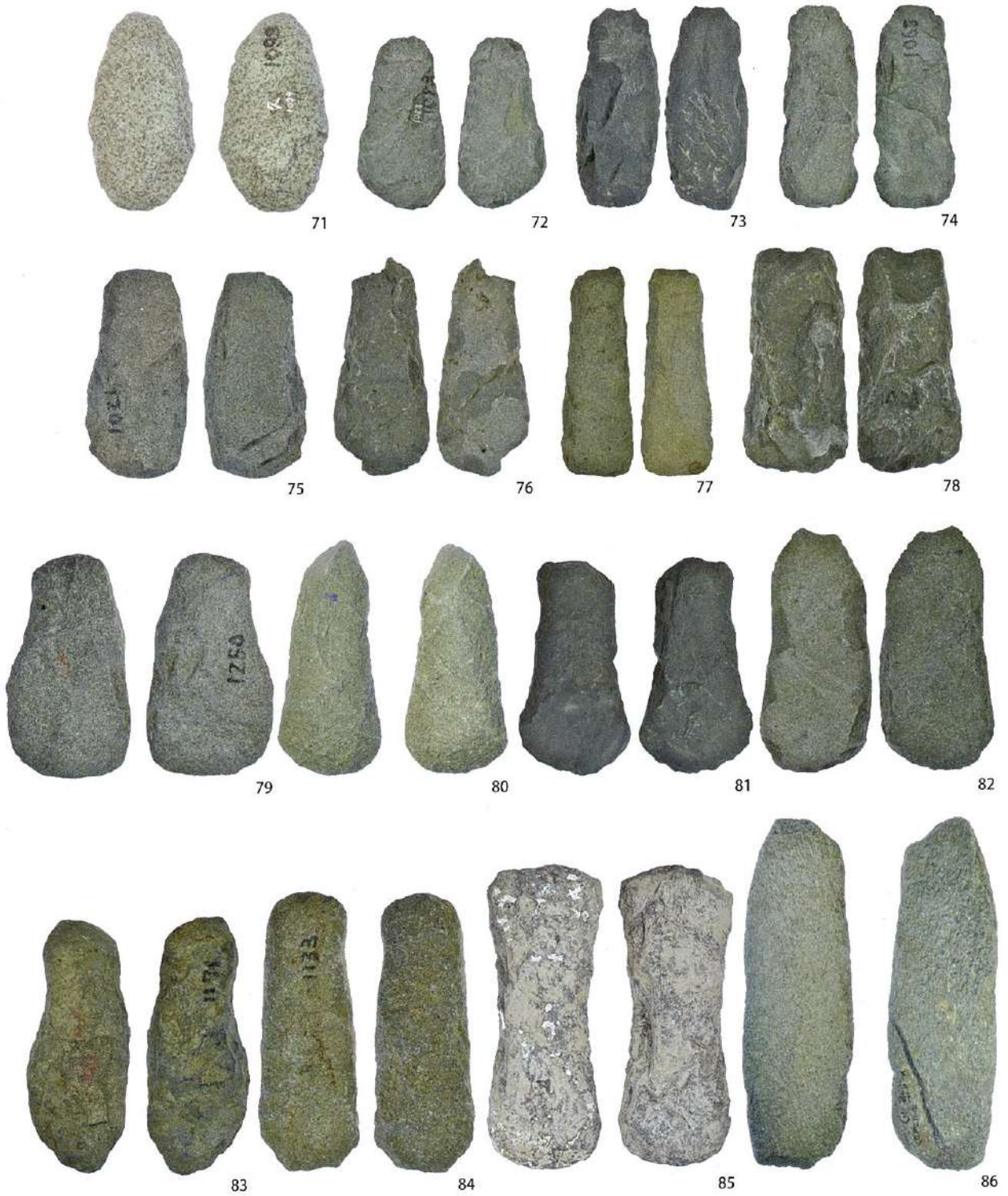
(54～56・58～62・64～70; 東京都久ヶ原出土, 57・62; 東京都馬込貝塚・S=1/3)



- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 54: ホルンフェルス / 厚さ 2.5cm / 重さ 185g | 63: 片状砂岩 / 厚さ 1.3cm / 重さ 59g |
| 55: ホルンフェルス / 厚さ 1.6cm / 重さ 70g | 64: 片状砂岩 / 厚さ 1.9cm / 重さ 185g |
| 56: ホルンフェルス / 厚さ 1.9cm / 重さ 125g | 65: 片状砂岩 / 厚さ 1.7cm / 重さ 115g |
| 57: ホルンフェルス / 厚さ 1.6cm / 重さ 76g | 66: 片状砂岩 / 厚さ 1.8cm / 重さ 100g |
| 58: ホルンフェルス / 厚さ 2.5cm / 重さ 160g | 67: 片状砂岩 / 厚さ 1.6cm / 重さ 100g |
| 59: ホルンフェルス / 厚さ 1.7cm / 重さ 105g | 68: 片状砂岩 / 厚さ 1.9cm / 重さ 160g |
| 60: ホルンフェルス / 厚さ 2.2cm / 重さ 130g | 69: 粘板岩 / 厚さ 1.3cm / 重さ 50g |
| 61: ホルンフェルス / 厚さ 1.3cm / 重さ 82g | 70: 珪質粘板岩 / 厚さ 1.3cm / 重さ 110g |
| 62: 片状砂岩 / 厚さ 1.5cm / 重さ 70g | |

71～86. 打製石斧

(71～84; 東京都久ヶ原出土, 85; 神奈川県杉田貝塚, 86; 埼玉県石神貝塚・S=1/3)



71: 閃緑岩 / 厚さ 2.3cm / 重さ 155g
 72: 砂岩 / 厚さ 1.5cm / 重さ 85g
 73: 砂岩 / 厚さ 2.1cm / 重さ 105g
 74: 砂岩 / 厚さ 1.5cm / 重さ 93g

75: 砂岩 / 厚さ 2.4cm / 重さ 155g
 76: 砂岩 / 厚さ 2.3cm / 重さ 165g
 77: 砂岩 / 厚さ 1.7cm / 重さ 90g
 78: 砂岩 / 厚さ 3.6cm / 重さ 275g

79: 砂岩 / 厚さ 2.5cm / 重さ 200g
 80: 砂岩 / 厚さ 1.4cm / 重さ 140g
 81: 砂岩 / 厚さ 1.6cm / 重さ 116g
 82: 砂岩 / 厚さ 1.6cm / 重さ 165g

83: 砂岩 / 厚さ 2.2cm / 重さ 170g
 84: 砂岩 / 厚さ 2.4cm / 重さ 246g
 85: ホルンフェルス / 厚さ 2.2cm / 重さ 265g
 86: 緑泥片岩 / 厚さ 1.2cm / 重さ 230g

87～93. 打製石斧

(87・88・90・92; 埼玉県石神貝塚, 89; 東京都本町田遺跡, 91 神奈川県下組貝塚, 93; 東京都久ヶ原出土・S=1/3)



87

88

89



90

91



92



93

87; 砂岩 / 厚さ 2.1cm / 重さ 294g

88; ホルンフェルス / 厚さ 2.2cm / 重さ 220g

89; 砂岩 / 厚さ 2.2cm / 重さ 255g

90; 砂岩 / 厚さ 4.1cm / 重さ 515g

91; 砂岩 / 厚さ 2.7cm / 重さ 335g

92; 緑泥片岩 / 厚さ 1.9cm / 重さ 506g

93; ホルンフェルス / 厚さ 3.9cm / 重さ 1200g

94 ~ 100. 打製石斧 (94・96・97・99・100; 埼玉県石神貝塚, 95・98; 東京都久ヶ原出土・S=1/3)



94: 砂岩 / 厚さ 1.6cm / 重さ 98g

97: 砂岩 / 厚さ 2.4cm / 重さ 218g

99: 網雲母片岩 / 厚さ 2.8cm / 重さ 355g

95: 砂岩 / 厚さ 2.3cm / 重さ 160g

98: 砂岩 / 厚さ 3.4cm / 重さ 369g

100: 砂岩 / 厚さ 2.9cm / 重さ 345g

96: 泥岩 / 厚さ 2.0cm / 重さ 135g

101 ~ 105. 磨製石斧

(101・102; 茨城県花輪台貝塚・S=1/2, 103・104; 樺太留加多 A, 105; 樺太鈴谷貝塚・S=1/3)



101: 安山岩 / 厚さ 1.1cm / 重さ 35g

102: 安山岩 / 厚さ 1.1cm / 重さ 35g

103: 砂岩 / 厚さ 1.2cm / 重さ 30g

104: 砂岩 / 厚さ 1.4cm / 重さ 60g

105: 砂岩 / 厚さ 3.6cm / 重さ 280g

106～110. 磨製石斧

(106; 樺太留加多 A, 107; 樺太出土地点不明, 108; 石神貝塚, 109; 樺太留加多 C, 110; 出土地不明・S=1/3)



111～112. 小型磨製石斧

(111; 子母口貝塚, 112; 新潟県小堂狐森遺跡・S=1/1)



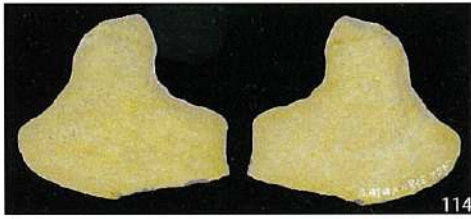
- 106: 凝灰岩 / 厚さ 2.4cm / 重さ 190g
- 107: 安山岩 / 厚さ 2.6cm / 重さ 300g
- 108: 凝灰岩 / 厚さ 3.4cm / 重さ 492g
- 109: 安山岩 / 厚さ 3.2cm / 重さ 375g
- 110: 緑色岩 / 厚さ 3.9cm / 重さ 907g
- 111: チャート / 厚さ 0.6cm / 重さ 3.7g
- 112: 安山岩 / 厚さ 0.5cm / 重さ 4.8g

113～118. 石匙

(113～117; 東京都本町田遺跡, 118; 北海道白滝遺跡・S = 1/2 (113のみ 1/1))



113



114



115



116



117



118

113: 水晶 / 厚さ 0.5cm / 重さ 2.4g

114: ホルンフェルス / 厚さ 1.3cm / 重さ 60g

115: チャート / 厚さ 1.0cm / 重さ 10g

116: チャート / 厚さ 0.8cm / 重さ 11g

117: 安山岩 / 厚さ 1.2cm / 重さ 25g

118: 黒曜石 / 厚さ 0.7cm / 重さ 10g

119～125. 石剣

(119～121; 埼玉県石神貝塚, 122・123; 東京都下沼部貝塚, 124; 桂台遺跡, 125; 茨城県前浦遺跡・S = 1/3)



119



120



121



122



123



124



125

119: 緑色岩 / 厚さ 3.1cm / 重さ 126g

120: 緑色岩 / 厚さ 3.1cm / 重さ 140g

121: 緑色岩 / 厚さ 3.0cm / 重さ 180g

122: 緑泥片岩 / 厚さ 1.9cm / 重さ 70g

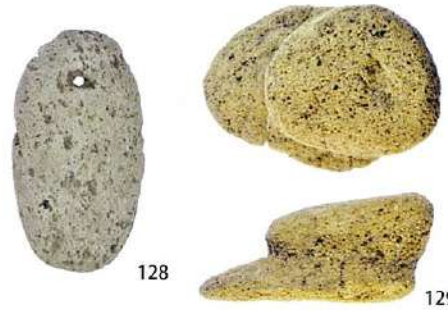
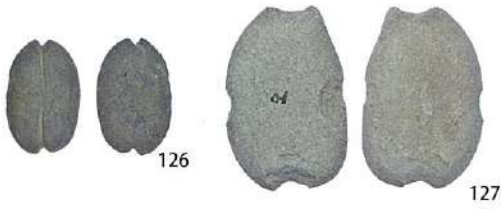
123: 緑泥片岩 / 厚さ 1.6cm / 重さ 105g

124: 粘板岩 / 厚さ 0.7cm / 重さ 95g

125: 片岩 / 厚さ 1.7cm / 重さ 85g

126・127. 石錘 128・129. 浮子

(126; 神奈川県桂台遺跡, 127; 樺太江ノ浦貝塚, 128; 神奈川県表谷東貝塚, 129; 東京都本町田遺跡・S = 1/3)



130. 大珠 (東京都多喜窪遺跡・S=1/1)

【硬玉製 / 重さ 22g】



126; 安山岩 / 厚さ 3.1cm / 重さ 126g
 127; 砂岩 / 厚さ 1.8cm / 重さ 77.9g
 128; 軽石 / 厚さ 1.4cm / 重さ 32g
 129; 軽石 / 厚さ 4.1cm / 重さ 23g

131 ~ 133. 石皿

(131; 埼玉県石神貝塚, 132・133; 東京都本町田遺跡・S = 1/6 (133はS=1/10))



131; 砂岩 / 厚さ 6.5cm / 重さ 916g
 132; 砂岩 / 厚さ 5.6cm / 重さ 2000g
 133; 砂石 / 厚さ 11.4cm / 重さ 5000g

講演会

日時：平成23年7月23日(土)

13時30分～15時

場所：熊谷市中央公民館

演題「石器製作と人々の思い～実験考古学で明らかになること～」

講師 久保田正寿氏(立正大学非常勤講師)

【参考文献】

樋口清之『実験的石器製造法』『考古学雑誌』第17巻第13号 昭和2年

八幡一郎『日本の石器』彰考書院 昭和23年

江上波夫監修・芹沢長介・大塚初重・森浩一編集『考古学ゼミナール〈学生版〉』山川出版社 昭和51年

大塚初重・戸沢充剛・佐原 真編集『日本考古学を学ぶ(2)〈有斐閣選書〉』有斐閣 昭和54年

加藤晋平・鶴丸俊明『図録 石器の基礎知識Ⅰ-先土器(上)』柏書房 昭和55年

加藤晋平・鶴丸俊明『図録 石器の基礎知識Ⅰ-先土器(下)』柏書房 昭和55年

鈴木道之助『図録 石器の基礎知識Ⅲ-縄文』柏書房 昭和56年

阿子島香『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社 平成元年

斎藤 忠『日本考古学用語辞典〈軽装版〉』学生社 平成10年

大田区立郷土博物館『ものづくりの考古学-原始・古代の人々の知恵と工夫-』東京美術 平成13年

大沼克彦『文化としての石器づくり』学生社 平成14年

鈴木美保『1研究史にみる石器製作実験-理論・方法、今後の展望-』『石器づくりの実験考古学』石器技術研究会編 学生社 平成16年

青梅市郷土博物館『誰もが出来た石器作り-青梅市郷土資料館特別展図録-』平成19年

久保田正寿『実験考古学的手法を取り入れた博物館実習』『立正博物館課程年報』13号 立正大学博物館学芸員課程 平成22年



久保田氏製作磨製石斧



石神貝塚出土磨製石斧

第8回企画展「石器のいろは～收藏資料の紹介～」

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成23年7月4日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL:048-536-6150/FAX:048-536-6170

E-mail: museum@ris.ac.jp

URL: http://www.ris.ac.jp/museum/